

## 変わる大学の学習環境

若林靖永 (CIEC 会長理事, 佛教大学)

飯吉透 (CIEC 副会長理事, 京都大学)

中森一郎 (全国大学生協連専務理事)

編集：CIEC 会誌編集長 寺尾敦 (青山学院大学)

**若林** 大学生のころ、どのような学生でしたか？

**飯吉** 私は、放浪している感じで、大学の授業を真面目にすべて取っていくというタイプではなかったです。直感的に自分が面白いと思うものは授業の中にありました。当時はまだネットのない時代なので、図書館での放浪はかなりしていましたね。そこで教育工学というものに出会って、大学にたまたまそうした学科があったので、すぐ飛び込んでしまったということです。

**中森** 私は平成元年に京都大学の法学部に入学しました。大学のテーマパーク化というようなことが世の中的にはいわれていた時代です。もともとは漠然と霞が関の官僚になりたかったのです。世の中を変えるには官僚が頑張らなければいけないという思いがあって、東大に行けばいいのだけど、一方で京都というところにも何となく憧れていたのが京大に来ました。

ただ、たちまち大学生協の学生委員になってしまいました。当時は生協のことばかりやっていればなんとなく大学生活ができますというような世界でした。公務員の試験は何回か受けたのですが、途中で考え方を変えて、霞が関は上から世の中をよくするというアプローチだけれど、大学生協は下からというか、足元からよい大学生を増やしていくことが大学生協ではできる。そうであれば、大学生協という立場で社会に貢献する仕事がしたいと思いました。

**若林** 私は、大学に入る前に、自分は何になるために大学に行くのかということで、いくつか選択肢があって悩みました。経済学部を選んだときには、経済学者になるために経済学部に行くと、一応、決めていたのです。ただ、経済学といっても広いし、今は経営学の中のマーケティングをやっているのだから、入ってからいろいろではあるわけですが。

大学生になっても、いわゆる教養部で経済学を学べるわけではないですね。当時、大学院生の人たちがチューターをやってくれる自主ゼミというものが経済学部にはたくさんありました。アダム・スミスの『国富論』を読む自主ゼミや、マルクスの『資本論』を読む自主ゼミに参加しました。今から思えば、一所懸命読んでもどれだけわかったかということはあるのだけれど、自分で自分の勉強をすること、大学が与えてくれる授業を受けることが学びではなくて、自分たちで勉強する場を作ってやっていくことを始めたのは、今でも一番大事なことだったし、それがあったのがよかったなと思います。

**飯吉** 私は、若林先生のようにやりたいことを決めて大学に来た学生ではなくて、むしろ全部少しづつやりたいというような学生でした。笑い話ですが、幼稚園の時に「何になりたいの」と聞かれて、幼稚園の先生に「何でも博士」と言ったらいいのです。けっきょくはそれに近い生き方をしてきたような気がします。大学というものは、私にとっては放浪と模索、探索を許してくれる場所でした。授業の中に入ってしまうとなかなか探索は許されないことが多いので、若林先生が言っていたような学生による自主ゼミなど、自分で学ぶことは大事ですね。

環境として、図書館があったり、学び系のサークルのようなものがあって、そこから与えられた影響はかなりのかなと思います。好きなものがそこで見つかって、それが今まで続いているので、それはよかったと思います。

**若林** 今の日本の大学は、入学時にいろいろな専門学部に分かれなければいけないという、一概に悪いとは言えませんがかなり早くに選択があります。大学に入ってから放浪しながら探せる、選べるということは大事で、今後の方向としては、そちらがもっと広がった方がよいと思いますね。もちろん放浪するためには、放浪するエネ

ルギーが必要なので、決められた方が楽な人もいて難しいところではあります。そこで自分のテーマ、課題を見つけられたということは、それが大学の意義なのだと、お聞きして思っています。

**飯吉** 今的に言えば主体性ですし、自分の学びの責任者になるというか、運転席に座っている感じですね。運転席に座っていても、決められた道を言われたように進む運転もあります。好きなようにオフロード走行をしていた感じはかなりあります。ただ、授業を無視していたわけではなくて、最低限は出ていましたし、そこからいろいろな着想を得たり、刺激をもらったりすることはそれなりにあったと思います。

### 大学教育の質保証だけでは足りないこと

**若林** 文部科学省がすべての大学に義務づけてしまったのが、アドミッション・ポリシーがあって、カリキュラム・ポリシーがあって、ディプロマ・ポリシーがあるということ、つまり、このような学生に入ってもらって、このような教育をして、このような要件を満たすから卒業させるというような形になっているわけです。イメージとしては、原材料があって、加工して、きちんと商品になって出していますよという、工場的なモデルに見えます。そのような見方で教育をデザインすることにもプラスの面があるから、一概にダメだとは言えませんが、そのような見方だけに徹すると、大学がもともと持っている、あるいは、これまで果たしてきた役割を評価できていないのではないかと思います。大学の可能性を狭めてしまう見方ではないかと、私には少し反発心があるのです。

**飯吉** 私は中教審の質保証システム部会の委員として、高等教育・大学教育の質保証に携わってまして、もちろんそれは必要なのですが、それだけではいけませんね。質を保証するということは、工場プロセス的なことだと若林先生も言われたけれども、結局はそこに陥らざるをえない部分があります。何が起るかわからないようなものは測れないし、質も保証できないというところが、一方ではあるわけです。けれども、大学の教育の価値や可能性というものは、何が起るかわからないようなところがかなり大きいと私は思っていて、その質保証は難しい。出口に何が出てくるかわかっていれば、そこを測れば「これは不良品だ」「これは合格だ」と言えるけれども、大学はそれをねらっているのかということですね。

そのように考えると、基礎的なこと、技能的なこと、知識的なことある程度押さえなければいけないと思いますから、そこは置いておくにしても、それ以外の部分です。今の社会が柔軟に自己拡張していける人を求めているのに、そもそも自己拡張する機会を大学で与えられにくくなっている昨今、懐古主義に陥らずに、どのように新しい形でそれを担保していくのか、自由な学びや成長を支援していけるのか。

**若林** これからの大学を考えていく上で、大学関係者がそこを自覚的に模索して、自ら問わないといけない。質と言って効率的・効果的に学生を育てていくような見方だけになっていくことは、やはり危うさを感じます。それだけでは足りないのではないかと、非常に思うのです。

### これからのオンライン授業と対面授業

**中森** オンライン講義は、われわれが外から見ていると、極めて工場プロセス的な知識の伝授のしかたのような印象を受けるのですが、実際はそうでもないのですか。

**若林** 先生がどのように準備して、どのようにやり取りするかで、見た目は同じでも違った効果が期待されると思います。先生が読み上げた講義を聴いて感想やレポートを書いたというオンデマンド講義だと、今までの一方通行的な講義をオンラインで再現しているだけで、それを学生は自分の好きな時間に聴くことができる。場合によっては、スピードを2倍にして、40分の講義を20分で聴くことができるようになります。

他方で、対面授業だと全員が話す場にはしづらいのですが、「だれだれさん、どう思う」「僕はこう思います」



というように、対話的な学びや協働的な学びが、オンラインのミーティングのツールを使う方ができるケースもあります。オンライン講義もいろいろです。

私は、ビジネススクールでの授業はもともと反転授業の形でやっていたのです。つまり、事前に教科書を読んで、事前に演習問題を解いて、それをレポートで提出してもらって、授業中にそれを発表してもらって議論するというをやっていたのです。オンラインでもこれがそのまま丸ごとできました。学生が発表して、議論して、他の学生に「どう思う」とたずねるとい、協働的な議論をしながら対話的に学んでいくということが、オンラインでもできます。

ただ、コロナで授業が一気にオンラインになったときは、多くは一方通行的なオンデマンド講義型が主流でしたね。そうすると、学生たちは先生が一方向的に話しているのを聴くだけですから、「私は大学に入ったんだろうか」という気持ちになる。こうした講義だけでは、「勉強しよう」とい、動機づけといえますか、学生たちの意欲をかき立てるようにはなかなかならなかったということがありますね。

**中森** 全国大学生協連ではずっと以前から学生生活実態調査をやっているのですが、オンライン講義に関しての学生の声は年々変わっています。2020年の最初の頃とはとにかく否定的な評価だったのです。「大学でそんな授業を聴きに来たんじゃないんだ」という意見が主流でした。それが2021年の評価は逆転して、なかなかいいという評価に変わりました。

今年2022年の評価は、オンライン講座で好評なのは引き続きやってほしくて、ただし対面講義とオンライン講義を並列的にやらないでくれというものです。同じ日に対面とオンラインがあると非常にパフォーマンスが悪いから。授業を対面でやるのであれば、オンライン授業とはもっと違う価値のことをやってくれという要望が出ているのかなという印象を受けました。

**飯吉** コロナの3年間に、学生はオンライン授業に慣れてきて、先生がたのオンラインツールの使い方もうまくなってきたという側面はありますね。

対面授業とオンライン授業が混在すると、オンライン授業をどこで受講すればいいのかという問題はあります。発言を求められるオンライン授業だと、学食やカフェテリアでは受講できないですから。そのあたりを大学や学部はあまり配慮していませんね。そこは今後の課題だと思います。

コロナが終わって基本的には対面に戻るとい形になっていますが、もう少し実験といか、続けていけるのであれば続けていけば、より良い形で、ベストミックスと呼べるものがどんどん普及していくのではないかと思います。ここで開いた箱からせつかく色々な可能性が出てきているところなので、どのようにさらに積み上げていくのかといことを、教育をする側、研究科・学部の側はある程度意識的にやっていかないと、単純に元に戻ってしまうかもしれません。このことについては、少し危惧しています。

**若林** 対面授業が再開できるようになって、授業形態の選択を個々の教員に任せるよりも、大学が組織として考える必要があると思います。自分のところの教育の課程を組む際に、これはオンラインをうまく使うコースだ、この部分は対面でやるものだなど、どのように組み合わせて全体を構成するか。今まではオンラインでやらざるをえなかったからやってきたけれども、これからはあえて対面を選ぶ、あえてオンラインを選ぶという、より望ましいものを選択して提供していくような議論をしていくことが必要なのだろうと思います。

**飯吉** 面白い例があります。僕の大学院のゼミでは、全員教室に来て対面でやっていますが、同時に全員パソコンを開いてオンラインでも参加しているのです。Zoomも使っている。なぜかといと、チャットを常にオンにして疑問や意見などをどんどん書く。それを他の学生が見る。学生どうしが勝手にリソースを紹介しあう。二重進行で授業が行われるという、今までなかったパターンです。

これは、オンライン会議的な方法でZoomを使っているのではなく、チャット機能がフルに使われていて、それによって学生のより深い関心を持続させることができるような授業が可能になったと言えます。こうなると、学生も教員も、旧来の対面授業に後戻りにくいといか、したくありませんよね。こうした新しい教育の手法が出てきたことは、コロナの功罪の功の部分ですね。

**若林** 全員Zoomで入りながら対面授業をやっていると、学生の誰かが資料共有をしたいときには、プロジェクターで映さなくても資料を画面共有しながら対面でも議論することになりますね。そこで「質問や感想を書き込んであげて」といえば、チャットなどで書き込むことができます。

**飯吉** 電子黒板や特殊な教室などが不要になってくる部分があります。どこでもそのような環境をオンライン上で作ることができますから。

**中森** 2020年から22年の変遷を見ていると、22年は「とにかく対面に戻しなさい」という動きがちょっと強く出てしまっていることは、疑問に思うところがあります。

**飯吉** 大学の経営側の判断は、なかなか難しいですね。ネガティブな声がある以上、対面に戻しておけば、「とりあえず元には戻ったので勤弁してください」と言いやすいので。

### コロナと大学生協

**若林** コロナの話がいくつか出てきましたが、家を出なくなって巣ごもり消費だということで、地域生協は宅配が急成長して、注文が殺到して商品が足りなくなるような状況だったようです。大学生協は、学生が大学に来ませんからね。授業がないので食堂の営業が止まっています。営業がこれだけの規模で全国的に止まることは、大学生協の戦後の歴史の中で初めての、本当に未曾有の危機で大変だったと思うのですが。

**中森** 昔の先輩方に言わせると「俺たちが学園紛争の頃はロックアウトがあったんだ」と言うのだけど、今回はより広範囲に長期的に影響が出てしまったという感じですね。

大学生協の場合は、コロナの前までは、学生は毎日学校に来ます。お昼には、学食でご飯を食べたり、ショップでサンドイッチを買ったりする。空いた休憩時間にはペットボトルを買う。夕方はサークルのメンバーと食堂で話しながら過ごす。こうしたスタイルが当たり前の、事業の基盤としてやってきたので、それが一気になくなったのは非常に大きなことでした。ですから、若林先生がおっしゃったように、2020年度の決算は史上最悪ですね。2021年、22年と改善はしていますが、まだまだ危機的な状況は続いています。

組織的な影響もかなり大きいです。一つは生協の学生委員会ですね。コロナの前は全国で学生委員が1万1,000人ほどいたのですが、コロナ禍で一気に6,000人台にまで減りました。今は7,000人台まで戻ってきているのですが、それでもかつての勢いはありません。絶対的な数が減っているし、対面での活動ができないのでオンラインでの活動をやったりするのだけど、なかなか組

合員さんに活動が広がらない。それに、先輩からの継承ができなくなってしまったので、何をやっていいかわからなくて、学生委員会が面白くなって辞めていくという、組織的な人とのつながりの部分でかなりマイナスのダメージを受けています。このあとこれをどのように反転させていくのか、大変だと思っているところです。

**若林** 学生委員会や、サークル的な学生どうしの活動、あるいは生協職員とのやり取りなどは、やはり対面で、人と人とで「ああ、こういう思いなんだ」ということがあって、手応えを感じて、自分の感情を動かして取り組んでいるということだと思います。オンラインは、いわゆる社会的な情動という、人と人との関係で生まれる感情の作用が弱くなってしまっているところがある。大学生協だけではないと思いますが、大学生協がポストコロナで意識的にそこを取り戻していく場を作っていくという、場づくりが大事な役割になるということではないかと思います。

**中森** そうですね。学生生活充実度を学生生活実態調査で毎年調査していますが、2020年の1年生がやはり一番落ちています。いままで8割が普通だったものが、5割台の充実度になってしまいました。2020年度の入学者は、21年に2年生、22年に3年生になっていて、各学年の中で常に一番下の数字なのです。充実度が一番低い。人とのつながりがあれだけ断たれたら大学生活は面白くなくなるということが、データとして非常によく出ていると思います。

興味深いのは、2022年の大学1年生の充実度は調査開始以来の最高値をたたき出したのです。われわれも驚いたのですが、よく考えれば、この1年生の人たちは非常に制約された高校生活を送ってきています。それこそ文化祭もない、学園祭もない、下手したら修学旅行もない中で大学に入ってきた。その2022年は、大学では対面講義ベースで始まった。そこで「大学生活、いいね」となったのではないかな。人と人が集うことが満足度に直結するのだと解釈できるデータになっていて、非常に面白いなと思います。対面講義は、大学生活において人と人がつながるといって、勉強するという以外以外のファクターとして、けっこう大きいのだと感じますね。

**飯吉** 確かに、2022年に入学した新入生は、高2と高3の2年間、もし部活などをやっていたらどんどん活躍すべきところで、ほとんどの活動がストップしていましたからね。

**中森** 2023年は、高1から高3までもろに制約を受けた人が、期待して大学生活に入ってくる。ですから、大学生協連としていま各生協に、私たちは苦しいかもしれないけれども、彼らは大学生活に非常に期待しているから、「大学生協に関わったら楽しいよ」ということを頑張ってお伝えしてくれと言っているのです。そうしたら、大学に入ったら楽しいことができそうだと、また勢いが活性化するのではないかと思うのです。

**若林** 最初にいろいろな形で関われる場を作らなければということ、確かにそのとおりですね。2023年は、コロナがなくなったわけではないけれども、ポストコロナで社会を進めるしかない。もちろん大学生協もそうですが、学会もそうですね。コロナで対面の活動ができないことで、さまざまなダメージを受けている組織・団体はいろいろあるわけですが、だからこそ、2023年はなおさら心していきたい。気合を入れてリスタートといえますか、再出発、再建するのだというようにしないと。京都では、祇園祭や、今度は葵祭もそうですが、関係者たちは必死です。1年やらないだけでもどんどん忘れて、2年も3年もやらないと引き継げなくなると言われているのです。ですから、継承できるように、ここで一所懸命やろうとしていますね。

## 学習環境としての大学の授業

**若林** ではここで、この鼎談の中心テーマですが、大学を学習環境として見ます。大学生協も広い意味で大学の環境の重要な構成要素ですので、一緒に取り上げられればよいと思います。学習環境として見るということは、そこに生活をする、そこにいる人を学習者として捉えて、その周りにあるすべてのものを、学んでいくプロセスにおいて学習者が影響を受けるものとして見ています。

第一義的には、大学の授業あるいは教室など、授業そのものが大学教育という学習環境になるわけですが、学校がそうであるように、大学も本当に大きく変わってきています。昔は、偉い先生が90分一方通行的に説明をして、学生はひたすら板書を写して終わる授業ですね。今はそのような授業はほとんどなくなって、授業の内容も事前にプリントにして配ってあげるなど、学生にとって学びやすい工夫をしている授業が増えています。あちらこちらの大学がいま積極的なのはPBL (Project/Problem Based Learning) ですね。大学の外に出て、社会のさまざまなフィールド、さまざまな企業や社会团体等と接点を持って、そこで取材したり、何らかの課題を見つ

けて課題解決のための取り組みの企画を考えたり、それを実施したりという形ですね。一方通行的な授業から、学生同士がグループを作って、学びあって発表しあうような授業です。広い意味ではアクティブ・ラーニングともいわれていますが、そのような授業が広がるなど、大学の授業を見ると大きな変化がここ10年ほどの間に起こっています。

**飯吉** 10数年前にMIT (マサチューセッツ工科大学) にいたことがあって、そこでまさにアクティブ・ラーニングというものが始まりました。それまでは、基礎物理のような授業は先生がやっていたものを、コンピューターを使ってグループ学習にしたら、「こんなに高い学費を取って、こんなことをやらせるのか」と一部の学生たちが怒りました。若林先生が先ほどおっしゃった、偉い先生が半ば狂気のように自分の好きな学問についてとうとうと語るのを見て、「すごいな」と思ってやる気が出るのだと。学生どうしがやるのであればどの大学でもできるし、先生は奥に引っ込んでしまっているから学生がやり取りするレベルでしかないという批判が出てきたわけです。けっきょくMITは、先生がほぼ一方的に講義する授業か、アクティブ・ラーニング中心の授業か、好きな方を取りなさいと学生に選ばせることで妥結したという経緯があります。

このエピソードは、いまだに心に響いています。つまり大学の先生は、別にスターになれというわけではありませんが、学生にいい意味での熱量を伝える義務があって、それが仕事だと思うのです。そういうことができなければ、研究者になろうという人も出てこなくなってくるし、みんなでお互いに切磋琢磨して学べれば満足だということだけでは、物足りない部分がたぶんあると思うのです。

オンラインなどを組み合わせながら協調的な学習がかなりできるようになってきたからといって、むしろ教員はそこに甘んじずに、何かもう一步抜け出たところで、大学教員の役割を再定義していくとか考えていかないといけない。学部教育であれば、それこそAIが面倒を見ていくようなことが、ある程度できると思います。そういうものにとって代わられてしまって、研究は大丈夫だと思いますが、教育に関して大学教員は何をすればいい職業なのかということですね。そのあたりは、新たな学習環境や学習方法が出てくる中で、問われるべきことなのではないかと思えますね。どうしても学生や学び手の側にフォーカスがいきますが、教員は単に待機して助けが必要な学生を助けるだけでいいのかということ

すね。

**若林** どんどん学問が標準化して、大学で教える教育は教科書にまとめるようになっていて、標準的な教科書の内容をいかに効率的・効果的に学生たちが苦しまずに学ぶか。誰も苦しみたくありませんから、標準的に学ばなければいけないことはそのような方向にどんどん進むのですね。

ただ、それが進めば進むほど顔が見えなくなるのです。学問をするのも科学研究をするのも人間であって、教えるのも人間であって、その人間がなぜこれに打ち込んでいるのか、どのように頑張っているのか。どのようなひらめきやこだわりがあって、場合によってはどのようなミスをするのかも含めて、人間的な営みであるわけです。その全体が教育の場、学生たちにとっては学びの場だとすれば、大学教授という人間が学生に向き合っていて、このような研究者という存在がいることをどのように伝えるかということは、あらためて、授業のもう一つのテーマのような気はしますね。

**飯吉** 面白さや醍醐味のような領域のことですよ。そうでないと、若林先生が言われたように、効率化だけを考えていくようになる。効率的に教えられるのであれば標準化していくという悪循環ですね。そこに陥ってしまうと、大学教育が味気ないものになってしまう。義務教育が味気ないとはとても言えませんが、その延長線上でやるべきことが決まっていて、それをできるだけ確実に効率的に達成しなさいという教育になってしまうと、大学教育はそうであってはいけないという強い思いがありますね。

**中森** いま飯吉先生がおっしゃった「熱量を伝える」ということはよくわかります。非常にわかりやすい授業もあります。何を言っているかよくわからないけれども「この人、すごい熱い思いを持ってるな」という授業もあると思います。それが、あの先生の授業はわかりやすかったか、わかりにくかったかという物差しだけで測られてしまうところに、違和感があります。

**飯吉** そうですね。何でもベビーフードにすればいいという話ではなくて、「うわ、これ固いな」と。固いけれども、かみごたえも味わいのうちだという。最近は何れ個別対応のような話になっていますが、あまのじゃく的に見れば、個別対応でベストにチューニングされたものだけを与えられていたら、未知の世界や違和感のあるものに

飛び込んでいくことを誰もしなくなるのではないかと。じっと待ってれば、それこそAIが「あなたに最適なように料理しましたから、これを召し上がってください」というような教育になってしまうと、いつまでたっても鍛えられないという危惧があります。

ではこれとは対極的に全員に共通化されたカリキュラムでやればいいのかというと、それも違うわけで、チャレンジし続ける意欲を人間にどのように持たせ続けるかということが、大学だけではないと思いますが、これからの教育では非常に問われていくところだと思います。

**中森** 私は大学で法律を勉強していたのですが、けっきょくは法律にあまり縁のない仕事に就いています。法律の勉強には苦勞しました。大学を出るときにゼミの先生にご挨拶に行くと、法学部において何がよかったかといったら、『六法全書』を見ても嫌な気持ちにならなくなった、面白いと思って見るようになったと言ったら、「それでいいんじゃないですか」と先生に言っていただきました。それで救われたというか、自分が大学にいた意味もそこそこあったのだなと思いました。社会人になってからも、嫌ではないので、法律をいろいろと調べたりできるようになりました。あのとき先生に「そんなんじゃないだめだよ」と言われていたら、苦手なまま終わっていた気がします。先生方には、人間的なところで支えていただくことは大事なのではないかと思えますね。

**若林** 日本の大学教育の面白さはそこにありますね。本来、学部で専門に進んでいるから、専門家を育成するプログラムとして大学教育が提供されているかのように言っています。しかし、現実には経済学部を出て経済学を使う仕事に就く人はほとんどいない。法学部を出て法律を専門に扱うような仕事に就く人もほとんどいない。けっきょくのところ、たとえば経済学を主に勉強して、それで教養を身につけて社会で活躍する。法的なリテラシーのような法学的な物の見方を、事案などを通じて社会のさまざまな場面に活かす。このように、専門学部なのに教養的に学んで卒業するというのが、日本の学部教育のユニークなところだろうと思います。

**飯吉** 英語でディシプリナリー・スタイル（ある学問分野固有の学術的作法や流儀）というものがあります。中森専務のお話で、法学部に入って『六法全書』を読むことが嫌ではなくなった、見るのが嫌ではなくなったということは、なんらかのディシプリナリー・スタイルが身についたのだと思うのです。それはスタイルなので、

『六法全書』をいつも抱えて仕事をされているわけではないとはいえ、何かを法学部で身につけられているわけですね。

**若林** 何かどころか、中森専務の場合は明らかに、文章のライティング力は法学部的だと思います。法律を書くことは大変で、目的を書いて、対象を定義して、要件を定めて「こうだ」という、もう一つのプログラミング言語のようなものですよ。非常に構造化されているわけです。

**飯吉** そうですね。難解な長文を読んで、感情的にあまり動かされないけれども、理解してまた書くことができるということが、法学のディシプリナリー・スタイルだと思います。そのようなスタイルがそれぞれの分野にあるのだから、若林先生が言われたように、経済学部に行って経済に直接関与する仕事に就かなくても、流儀というか、そういうものは大学で身につけるべきなのです。

いわゆる表層的な知識や、資格試験に対応するためにというようなものだと、スタイルまでは身につかないのではないかと思います。スタイルを身につけさせるためには、学部教育的なところ、リベラルアーツではない専門的なところの役割が一番大きいのではないのでしょうか。

**若林** 学んだことを学んだ領域で活用するということが、たとえば、九九を学んで算数の掛け算のドリルを解くようなことは、授業や学校教育の中でできているわけですが、自分の暮らしに活かすとすると、その知識を他の問題に活かすという議論が必要になりますね。飯吉先生からいま聞いたスタイルは、自分の持っているリソースとして他の領域でも活用できるようになる。もしかすると中森さんは、大学生協の学生委員会の活動をしながら、一方で法学は難しいと言いつつ悪戦苦闘したということの相互作用といいますか、両方を何とか両立することで互いに互いの学びを生かすように自分を育てていったということがあったかもしれません。

## 学びの場としての学生生活

**若林** 先ほど、大学を学習環境として見たときの第一に、授業にフォーカスして、効率的な授業だけではなくて、教師の人間性のような一人格が持っているものの意義も再認識すべきではないかという議論が出ました。大学を学習環境として見るときの二つめとして、自主ゼミなど、学生自身が自主的な活動をして学んでいくこと

があります。もちろんそこに教師がインストラクターやアドバイザーとして関わることもあるだろうし、教師以外のいろいろな人たちが関わることもあると思います。図書館や、最近の図書館の拡張バージョンであるラーニング・コモンズなどは、学生の自主的な学びを支える学習環境ですね。

第三に、大学の教育カリキュラムを超えて、サークルや部活、大学生協の学生委員会、アルバイトなど、最近ではオンライン、オフラインともに学生が参加できるさまざまな学びや活動があります。大学内外での学生生活自体が学びになっているようなことがあるのだろうと思うのです。いまお話にあったスタイルのようなことは、大学の中の専門の勉強に活かすことのみならず、いろいろな新しい問題に取り組んだり、大学内外でのさまざまな自分の活動に活かしたりすることにつながります。大学を学生の学びの場として捉えるときには、授業だけではなくて拡張して捉えることが非常に大事だと思うのですが、大学生協は学生にとってどのような場になってきて、今後もなっていこうとしているのでしょうか。

**中森** 生協は組合員自身が出資者で、オーナーだという組織です。今までもそうだし、コロナ禍からだんだん復活していくというプロセスの中でも、そこを十分活用した方がいいと思うのです。今日も午前中にたまたま、奈良の大学生協の専務理事さんとお話したのですが、奈良教育大生協の食堂は天井が高いので、非常に暖房効率が悪いそうです。いま水道光熱費が非常に高くなっていて、どうしようという話になったときに、そのような問題も含めて組合員に言えばいいのだと。うちはそのような構造的問題があるので、暖房はそれほど暖かくなりません。それを学生に相談して、厚着してファッションショーをやればいいのではないかなど、水道光熱費の問題だから生協職員の問題だということにするのではなくて、みんなの問題として考えたときに、面白おかしく、みんなで知恵を出し合ってクリアできるやり方はないか。そういうことをみんなで考えて、実践して、トライ・アンド・エラーしていくことがやれるようになると、うまくいってもいなくても「生協ってこういうところなんだ」ということが広がるのではないかという話をしました。これからは、コミュニティの皆さんと一緒に考えて、みんなで解決していくという経営でないといけないと思います。

**若林** 確かに、学びの場になるかならないかの大きなポイントは、自分が当事者、主体だと思うことですね。

学生はあくまでも生協のお客様で、文句があったらクレームを言うだけの関係性だと、学生自身が関わって学んでいって、作り上げていって、またそのことによって学ぶというプロセスになりませんね。学生をお客様扱いせず、一緒に考えてやっていこうということは、大学生協らしいし、学生にとっても学びやいろいろなことにチャレンジできる場になる。生協側も、学生のパワーや参加で、生協らしく充実した発展が見込める。そこは鍵かもしれませんね。

**中森** われわれにとってみると、大学生という、思想・発想が比較的柔軟な世代を組合員として組織しているということ、最大限、利点に使わなければいけないのではないか。経営問題をこちらで考えようとするのではなく、経営問題も赤裸々に出したときに、克服する面白い方法はないか。そのことを当事者として一所懸命考えてもらおうという、当事者性を持った対応が大事になってくると思いますね。

**飯吉** 今のお話を聞いていて思うのは、学習環境というよりも、自分たちが生きている生活環境を少しでもいい環境にしようということは、ごく当たり前の話ですよ。みんなで知恵を出しあって、いま抱えている問題を解決していこうということは、まさにプロジェクト・ベースド・ラーニングです。生協はプロジェクトのテーマをたくさん提供できる、学生にとって一番身近であるべきコミュニティですね。そこを学生にどれだけ気づいてもらえるようにできるか。もっと言えば教員にもですね。

**中森** 生きた素材は山ほどあって、ごろごろ転がっています。

**飯吉** 教職員でもなければ学生でもないという立ち位置は、実に貴重だと思います。

**中森** そうなのです。その生きた素材を、これは学生の成長や教育にとって意義があるかもしれないと思って問題提起することが、生協職員の腕の見せどころです。それができると、仕事としても教育に貢献しているというモチベーションが生まれるので、生協職員もやはりそのようなスタンスで学生に関わらなければいけないと思いますね。

**若林** 食堂や店舗の経営について、もっと開示して、も

っと一緒に考えてもらっていいし、運営やイベントも、コミュニケーションのコストがかかるし、手間ひまはかかるけれど、特に小規模な生協ほどそれが可能かと思えます。そういうことをすればするほど「自分たちのお店だ」となります。自分たちで作っていくことで愛着も湧いてきます。

主体的に自分に関わることで、何かを変えることができ、そのためにどのような知識やスタイルが必要か学んでいきます。学習というものは、専門知識を覚えて100点をとるということではなくて、自分の生活課題にどのように活かしてやっていくかというプロセスと連動している。大学生協はそのような場をたくさん用意できる。学生たちが、課外活動としてさまざまなサークルやクラブを作ってやっていることも、学生の重要な学習の場としてあらためて位置づけ直すことが大事だなと、非常に思いましたね。

**中森** 日本の大学は、不本意入学というか、本来は行きたい大学があったのだけど残念ながらこちらに来たという学生が多くいます。まもなく新入生に対して歓迎活動をやっていますが、先輩が非常に楽しそうに自分の大学生活を話しているのを聞いていると、「この大学生活もまんざらではないかもしれない」と思うようです。大学生協の組合員組織の中で、学生どうして気の持ちようを好転させるこうしたアプローチもできるということは、学内では意義のあることではないかと思えます。

**飯吉** 失礼な言い方かもしれませんが、非常にいい意味で、大学生協はコミュニティの潤滑油となりますね。だんだん経営もきつくなっていく中で、大学の教職員は常に効率化や「無駄をなくせ」的なモードに入らざるをえないから、コミュニティの豊かさや文化などがなかなか入り込みにくくなってきているわけです。学生さんが「この大学がいい」と自分の母校を誇ることができ、ここが自分にとってはいい環境なのだと思うようにすることは、大学の教職員だけができることではないですし、今はむしろやりにくくなっている部分があります。ですから、潤滑油、つなぎ手になっていくという意味での生協の役割は、今だからより大きいのではないかと思います。

**若林** 大学生協の多くでパソコン講座が行われています。単に研修をするのであれば、効率的にやる方法はお金を出せばいくらでもあります。そうではなくて、それぞれの大学でそれぞれの学生に向けて展開することを目



指して、先輩から後輩に「大学で勉強するということは、こういうことだよ」と応援してあげるのでですね。先輩の学生もそのためにスキルをきちんと上げて相談にのる。先輩・後輩の、学生どうしが学びあうコミュニティをきちんと作りながら講座を提供するというのを一生懸命やっています。これは、手間ひまはかかるのだけど、このプロセスあるいはこの場に価値があるということで、大学生協の提供する価値として自覚的に捉えることが必要だと思います。

**中森** パソコン講座は大学生協としてももっと伸ばしていかなければいけない分野だと思います。学生の実態にもっと立脚していく必要を感じています。たとえば、新入生がパソコンを買うときは学習のことしか想定しなないですね。しかし、実際に学生がレポートを書いているときは、ワードとかエクセルとかパワーポイントを開いている一方で、実はYouTubeも開いて、音楽とか、いろいろと見ている。そういうリアルな実態をもっと踏まえていくと、メモリやハードディスクはもう少し余裕を持たせるといような、なるほどという提案になっていくことがあると思います。学生の実態をもっと知らなければいけないという側面があります。

たとえば最近注目されているChatGPTは、われわれにとってはまったく知らない世界なので、大学の先生からきちんと教えていただいて、ディスカッションをして、一定の見識を持った形で、生協としてはこのように受講生に伝えていくのだということができるようになっていきたいです。そうすると、非常に独創性というか、ユニークな存在になってくると思います。

**飯吉** ChatGPTは、使わせるのか禁止するのか、大学としては扱いにくいものです。禁止するなら、それを前提に講習会を開くといったことしかできないわけです。生協がやるイベントであれば、もっと自由に、しかし大学のコミュニティの一部としてやれます。恵まれた位置に立てる存在だと思います。こうした点はぜひ活かしていただきたいですし、先輩が後輩を指導していくような部分で、単に人と人をつなぐだけではなくて、意味のある形で伝承していったほしい。デジタルやオンラインではそうした伝承はなかなか難しいと思うので、ぜひそこは、新しいポストコロナの形も踏まえながらやっていただきたいと思います。

## 大学の外に学習環境を広げる

**若林** 学習環境としての大学は、一つめが授業。二つめ

が、図書館など、学生の自主的な学びや協働的な学びを支える環境。三つめとして、専門の学習をする以外のさまざまな学生生活自体が学びの場であると捉えました。今日では、大学が大学の外に広がっていく、第四の役割があります。これもいろいろな方向性があります。

たとえば、大学が持っている教育のリソースを社会に広げていくことがこれからの社会を支えていく重要な基盤になる、あるいは変えていく力になるといった議論から、オープンエデュケーションとしての取り組みがあります。以前に飯吉先生とこのテーマで話し合ったり、PCカンファレンスでもお話をさせていただいたりしたことがありますね。オープンエデュケーションを中心に、大学を超えていく、広がりのある学習環境について、日本あるいは世界での到達点といますか、どのような状況になっているのでしょうか。

**飯吉** もともとオープンエデュケーションは、大学の知を世界的に開放していくということで、社会貢献的なミッションといますか、そうしたねらいのもとで興ってきた部分があります。大学に行ける人と行けない人の格差を縮める、ということもあったと思います。

ご存じのように、オープンコースウェアやMOOCなどがかなり普及してきています。MOOCは、世界中で2万講義も作られています。一つの大学でどれだけの数の講義を出せるかを考えれば、大変な数ですね。質については、誰にとっての質なのかの問題です。いくらいいものでも理解できなければ意味がなくて、自分にとって役立つものが一番質がいいと言えると思います。ですから、他人から「これは質がいいから使え」と言われても、個人的には「そうかな」ということはあると思いますが、いずれにせよこれらの教育的リソースは、量的には十分賄われていると思います。

大学という組織として考えれば、一つの問題は、非常勤講師を雇わないと提供できないような講義をオンラインのオンデマンド的なもので代替していくという、いわば部品の共通化です。これは、大いに議論の余地があり、反対も大きいところだと思います。経営者の立場としては、そのように進めていかざるを得なくなっていくのかもしれない。それがオープンエデュケーションの末路だとすれば、大変嘆かわしいことです。ただし、活用の方法次第であると思います。オープンエデュケーションを利用すれば、学生が自分の大学の授業にしばられずに、色々な科目を学ぶことができます。自分の大学の科目として学んでいるものでも、他の大学の先生が違う教え方をしているものがオンラインで覗けるというメ

リットもあるかと思います。

ここで大事なことは、大学や社会というよりは個ですね。個人が、まずは生きながらえていくために色々な仕事をしたり、色々なものを学びたいと思ったりしたときに、それをかなえてくれる。今の仕事を続けながら別のことにも取り組みたいというときに、そこで何か大きなジャンプを強要されて、ジャンプできなかつたら割れ目に落ちてしまうようなことが起こらないためのセーフティネットとして、大きな意味での学習環境がオープンエデュケーションによって整備されたのだと思うのです。

ですから、OS的な学習環境はできているのですが、克服すべきは届くべき人に必要とされる教育リソースが届いていないというマッチングの問題ですね。MOOCだけでも2万講義あるのに、その存在を知らないとか、知っていても英語だから使えないとか。そこで自動翻訳を入れたり、AI的なレコメンデーションをしたりというような支援はこれからどんどん出てくると思いますし、出てくべきだと思います。インフラとしてのオープンエデュケーションはもう構築されたので、あとは一人一人の人に役に立つものにしていく支援のシステムが第2ステップですね。

**若林** おっしゃるとおり、学びたいけれども学べない、あるいは学ぶことがよくわからない人には、うまく届いていないですね。

学びたいという意欲もあるし、何を学ぶかということ、なぜ学ぶかも明確だという、強い個人であれば、オープンエデュケーションがない時代でも、必要があれば大学教授のところへ直接行って、「教えてください」とできました。自分が学生のころと比べると、本当に学習をしたい人たちにとってみれば、学習環境は大きく改善されていて、いくらでも学べる場になっていると思います。

そうではない人からすると、MOOCで講義がたくさんあっても選べないし、わからない。今のリスクリングのように「あなた、このままでは食べていけませんよ」と脅迫されて勉強するのではなくて、自分で主体的に、納得しながら学習プログラムを作って、それを活かしていくように、学びと実践、学びと社会生活をうまく連動させていくところが残念ながらできていない。

オープンエデュケーションやeラーニングの業界の関係者のいろいろな取り組みで、わっと注目を集めて、やる気のある、意欲のある人たちが集まるから、「ここはすごいな」と思うのだけれど、社会全体で見ると多くの人が取り残されているというギャップは非常に感じます

ね。

**飯吉** きっかけですね。大学のようなコミュニティで、対面で人と人が話していくと、何かきっかけが出てくる。大学の授業の中でもきっかけがあるかもしれないし、授業の外でもあるかもしれない。そのきっかけが、あるようになくなってきているというか、溢れ過ぎてしまっていて一つ一つのきっかけの重みに気づかないというか。じっくりマイペースでやるのが、非常に難しくなっています。リソースが多種多様で、量的にも非常に多くなってきた時代の弊害だと思うのですが、MOOCで講義が2万もできてしまったことは、ある意味では災いなのかもしれませんね。

ソーシャルネットワークが広がっているように見えても、実はSNSのペースがあって、そこに無理やり強制的にシンクロさせられているというような、今までにはないところでの強制力や、シンクロさせられて進まされていくことが増えてしまい、じっくりマイペースで、まさに知の放浪的なことや、やりたいことをじっくりやるということが、非常にやりづらくなってきています。

**若林** そこは本当にコミュニティの功罪です。コミュニティがあることで相談にもものってもらえるし、自分の知らないことを知るきっかけにもなるし、いろいろな接点があることがそのような場にもなるのだけれど、他方で、自分が他人からどのように見られているかを気にして、みんながマスクをしているから私もマスクをするということになると、自分にとって本当の学びは何か、自分にとってきちんと学んでいるのかという、自分に対するリフレクションが弱くなるのですね。周りに同調するのではなくて、そこをきちんと大事にしていかないと、オープンエデュケーションのようにいろいろなリソースがあっても自分のものにできない。

**飯吉** ビュー数が多いコンテンツだから見たり、見るときもできるだけ効率的に、早送りしたり要約版を見るようになると、きっかけや個人的な思いは生じにくくなる気がします。AIは、効率的な学習というところでは大いに助けになりますが、あまりデザインされ過ぎていたり、計画され過ぎたりしていたら、やはりきついですし、面白くないと思います。

人間のいい意味での雑な部分やランダムなノイズのような部分も含めて、あえて整理されていないものを学習環境に入れ込んでいかなければいけない。言うは易しですが。

生協は、そのような領域もテリトリーとして持つておられるのではないかと思います。コミュニティとしての生協は、計画や効率だけではなくて、もう少しおおらかに、人が中心というところで考えられるのではないのでしょうか。

**中森** シンパシーが大事だと思います。自分のところの生協が危機的な状況になっていることはあまり知られていません。大学の方も学生も、昼は普通に営業しているし、メニューは少なくなったけれども何とかやっているように見える。けれども、実は大変な状況になっています。そのような状況なのだとすることをきちんと知らせていくことが必要です。

自分も何か力にならなければいけないというときに、利用するというやり方もあるけれども、自分が持っている知識を活用して企画をやってみるような進め方もあると思います。共感をして、「自分がやれることをこの人のためにやってあげたい」というような動機は大事です。大学生協の中で活用できる場所はあります。

**飯吉** デジタル化されていく中での非常に大きな弊害だと思うのですが、ファンクションで物を見がちになるわけですね。たとえば、生協であれば、「物を買うならアマゾンでいいじゃないか」という短絡的なことになる。生協はそのような側面だけではないのに、多くの人たちは、物を買うところ、サービスを受けるところというイメージが強いと思うのです。コミュニティの部分や互助的な部分、みんなで力を合わせてよくしていく部分は、アマゾンとは違う世界なわけですから。

**中森** そうですね。

**飯吉** そこが今、非常に必要だし、重要な部分なのに、学生に届いていないですね。コロナで物を買うという行為にだけフォーカスが行ってしまったり、オンラインでできることがコミュニティ的には限られていたこともあって、このままでは新しく入ってくる人たちには忘れられたものになってしまう。

**中森** CIEC との関係では、コロナ禍で大きく影響を受けているので、PCカンファレンスを大学で開催することが難しくなっています。京都大学で開催するのであれば京大生協がかなりの役割を担わないと無理ですし、「よしわかった」とやってくれる大学生協がこれから出

てきてくれるだろうかと、私は戦々恐々としているところがあります。

ただ、そこにチャレンジをしていくことは、生協は単純にパソコンを売っているだけではなくて、そのことを通じて教育に関わろうとしているのだということを、大学の先生方に示していくことになるわけです。大学でPCカンファレンスをやることは、自分たちも教育を考えて、みなさんと一緒にやりたいのだということです。こうしたことをきちんと発信していったら、そこで「なるほど、そうだよ」と広がっていくと、前に進んでいくので。前を向いて、自分たちがやれることよりもちょっと背伸びしてチャレンジするとき、いろいろなことを学んだり、いろいろな人の話を聞いたりということが起こって、それが大事なのではないかと思います。

**飯吉** 京都大学のX-academy（クロスアカデミー）でしたか、あれは本当に素晴らしいと思います。学生が集まってきて、横のつながりもできてくる。緩い意味での学問的なところで、越境的な部分も含めて、まさにクロスの部分です。そういうものにどんどん力を入れて、そこで経営的な苦勞も少し和らげていけると一番いいですね。

**中森** 大学と生協はパートナーなのだとすることを、大学のトップ層の人にも思ってもらわなければいけないし、教員の人にも、学生の人にも思ってもらわなければいけない。多方面での共感なり、リスペクトなり、そういうものでつながったパートナーシップは大学生協の経営にとって非常に大事だと思います。

**若林** 学生が大学の中でさまざまな自主的な活動を広げていって、大学生協にたくさん参加していることが、大学の手が届かないことをやっているという、広い意味での教育機能といますか、まさに学習環境として重要であって、大学生協に対する再評価にもつながるポイントだと思います。

そろそろ鼎談を終わろうかと思いますが、よろしいでしょうか。では、どうもありがとうございました。

**飯吉** 色々勉強になりました。ありがとうございました。

**中森** ありがとうございました。

(2023年3月20日 京都大学吉田泉殿にて)